

目標を達成できる授業とは

応用言語学講座 M2

川口 治花

1. はじめに

今年度の実習では、実習開始前に実習生全員で集まり、各日の学習項目と目標を設定した。その後設定された目標をもとにして、チームごとに担当する授業の流れを考えた。

しかし、実際に行った授業を振り返ってみると、授業内で行われる活動の一つ一つが、設定された目標を達成するためになぜ必要なのかということが不明瞭である場面がしばしば見られた。そこでこのレポートでは、実際に行った授業における問題点について考察するとともに、目標を達成するための授業とはどんなものであるのか、ということについて考えたい。

なお、授業は2012年2月16日(水)に行ったものを取り上げる。この日の学習項目は道案内、目標は道を尋ねることができるようになることであった。

2. 実際の授業における問題点

2. 1 授業の構成における問題点

2月16日は、以下の表のように授業を構成した。(これは授業前に教案を作る際考えられた構成である。実際の流れについては報告書の第4章を参照のこと。)

	時間配分	担当者	授業内容
1限	45分	筒井	◆前日の復習 ・「～方がいいですよ」 ◆文型・構文導入 ・「～に～があります」 ・道を尋ねる(文型) ◆練習 ・文型・構文を用いた練習
	45分	川口	◆文系・語彙の導入 ・道案内に関する語彙 ・「Vと～があります」 ・「Vて、Vて、Vと～があります」 ◆タスク①: 文系総合館内に予め貼っておいた付箋を探す
2限	35分	筒井	◆タスク② ・1限の表現を使うタスク インフォメーションギャップを用いてお互いに質問し合い、地図を完成させる
	35分	川口	◆タスク③ ・1限の表現を使うタスク Googleマップを用いてある地点からある地点への行き方を説明させる →Googleストリートビューを用い、その行き方が正しいかどうか教師と共に確認する ◆会話練習(時間が余ったら)
	20分	石黒	1限の復習と3限のタスクに向けた事前練習
3限	90分	石黒	屋外での活動(2グループに分かれ、実際に日本人に道を尋ねる練習)

この授業において筆者が担当したのは、表の通り、1時限目の後半と2時限目の中盤

である。ここで最も反省すべき点は、表では1時限目の後半に予定されている、タスク①（文系総合館にあらかじめ貼っておいた付箋を探すタスク）である。「1. はじめに」でも触れたとおり、この授業の目標は「道を尋ねることができるようになること」と設定されていたが、タスク①はその目標に向けて授業の中でどのような位置を占めるか、ということが考えられていなかった。さらに、このタスクの直前に導入した「Vと～があります」や「Vて、Vて、Vと～があります」といった文型とのつながりも薄かったため、このタスクの目的が非常に不明瞭なものとなってしまった。

学習者にとっては、長い時間机に向かって文型導入の授業を受けた後のタスクということで、楽しいものになったかもしれない。しかし、ただ楽しいだけでは授業の目標を達成することはできない。この日の授業では、3時限目に屋外で実際に日本人に道を尋ねるタスクを行う予定であったので、その場面を想定して、それに必要なことを逆算したうえで、タスクの内容を練るべきであった。

2. 2 授業での教師行動における問題点

今年度前期の「日本語教授法および実習」の授業において、実習の際に自分が授業をする様子を録画したものを見て、自らの教師行動を振り返った。そこで最も気になったことは、教師からの発言が学習者に伝わっていない場面がしばしば見受けられたことである。当初はその原因は声が小さかったことであると考えていたが、授業の際、「ここは必ず理解させる」ということを意識して話した方がよい、との指摘を頂いた。おそらく、実際の授業では、授業のポイントを教示自身が押さえないまま、流れにまかせて話してしまっていたのだろう。そのことが、教師からの発言が学習者に伝わらなかった原因だと考えられる。授業の構成を考える際のみでなく、実際に授業を行っている最中も、常に目標に向かっていくことを意識しなければならないと感じた。

3. まとめ—目標を達成するための授業を行うために

前期の「日本語教授法および実習」の授業の中で自らの授業を振り返ることによって、その問題点に気づくことができたとともに、「目標を立てて、それに向かって教えることが必要である」という新たなビリーフが自分の中に生まれた。今後は、授業の目標を達成するためにはどのような活動が必要か、また各活動にはどのような目標を立てるか、ということを考えながら授業を組み立てていきたい。さらに授業を行う際には、各活動の目標を意識したうえで、「何を質問するか」「どんな答えが返ってくるか」といったことを想像しつつ、学習者とかかわっていきたい。そうすることで、学習者に対しても、授業を通して何を学習できたか、何ができるようになったか、ということを感じさせることができるだろう。